



上徳不徳

## 死生観・私の思考遍歴

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず  
大石 久和



前回は、国土学を考えていくうちにたどり着いた西欧・ユーラシアの人々と、われわれ日本人との感覚・感性の違いを、「歴史観」に続いて「人為観」について説明した。それは何事も「天為」と考えるわれわれと、人が何かをしない限り何も変わらないという「人為」がすべての彼らという違いであった。

続いては「死生観」の違いである。死というものをどう捉えるのかに、彼我の間に大きな差異がある。それは、「人が死ななければならぬ場面」が大きく異なることから生じている。

「人の死の態様の違い」が、日本人とユーラシア人との思考方法や感性のあり方に大きな影響を与えているのではないかとの仮説を持つようになって、日本人の歴史家や学者のなかに、過去の紛争や戦争で何人の人間が死んでいったかを研究している人がいないかと長い時間をかけて探したのだが、見つかることができなかった。

たとえば「関ヶ原の戦い」は、わが国での最大規模の合戦で、東西両軍20万人が対峙したと言われるが、では戦い終わって何人が犠牲になったのかについては話題にもなっていないし人々も興味を示さない。

歴史書はまったくといっていいほど死亡の

大きさには触れていないし、合戦史も多く書かれているのだが、合戦死に触れた文献は見当たらなかった。そのため、たとえば「川中島の合戦」と「姉川の合戦」を比べて、どちらがより厳しい戦いだったかはわからないのである。

### ユーラシアでの紛争死の歴史

アメリカに、人類の紛争・戦争の規模や犠牲者の数を研究しているMatthew Whiteという研究者がいる。彼は多くの研究者のデータを整理し、戦争ごとの死者数を割り出したりする研究をしてきた。

かつてはWhite氏は著作を著わしていなかったのですが、筆者は彼のホームページ上のデータにアクセスして参考にしていたのだが、2011年にアメリカで初の著作を発表し、ニューヨーク・タイムズにも取り上げられた。

それが2013年3月に住友進氏の訳により日本語化され、早川書房から「殺戮の世界史・人類が犯した100の大罪」として発刊されたが、日本では話題にもならなかった。

本書によると、西欧・ユーラシアでは、紀元前の大昔から人々は、歴大な殺戮をとまなう紛争に明け暮れてきたことがよくわかる。

編年的に見ると、紀元前480年頃の第二次ペルシャ戦争で30万人、紀元前330年頃のアレクサンドロス大王の世界征服戦争で50万人（うち民間人25万人）、中国の春秋・戦国時代（紀元前470年頃～220年頃）に相次いだ戦争で150万人という様子なのだ。

このユーラシアでは、紀元前のはるか昔から「死は紛争・戦争とともにあった」と言えるのである。残された者にとって死は簡単に受け入れることができるものではないが、ここでは「相手を恨み抜くこと」「復讐の誓いを立てること」で、やっと何とか気持ちを整理できるということになる。これが、彼らの死の受容観なのである。

ここで、もう一つ重要なことは「次の戦いで勝利を確実なものにするための、方法や準備をきわめて合理的に思考して絞り出す」習慣を身につけていったということなのだ。西欧の合理主義への助走が始まったのである。

さらに重要なのは、軍団をしっかりと束ね、より強い軍団にするための「厳しい戒律と不断の信仰を求める一神教の発明とその受容」が必然的に生まれたということである。

## 日本人の経験

日本では、対馬海峡が200kmもの幅を持つことから（ドーバー海峡の30kmと異なり）、大陸から大軍の侵略軍が押し寄せてくることはなかった。元寇の際でも、騎馬はこの海峡を越えることができなかつたために、上陸できたのは馬を持たない兵ばかりで、むしろ鎌倉武士が騎馬で戦ったのだった。

1万年に及んだ縄文時代の遺跡から発見される人骨には、争いで生じた傷跡がないとい

われる。また、遺跡には集団戦を用意した痕跡が見られないという。これは縄文人が豊かであったこと、争いの必要もなかつたこと、争いを好まなかつたことを示している。

その後時代が下ってくると、紛争の跡も見られるようになるが、ユーラシアのような大量殺戮や殲滅といった戦いは、わが国では皆無だったと言えるだろう。先のWhite氏は日本の戦国時代を「儀式的な戦いの時代」と総括しているのだ。

その代わりというのも何だが、日本人は自然災害で死んでいったのだった。自然の気まぐれが、飢饉、洪水、土砂崩落、地震、火山噴火、津波、高潮といった災害を何度も日本人に課したのだ。特に江戸時代以前では飢饉がたびたび大量死をもたらした。貴族の日記には、京都の街なかや鴨川が飢饉による大量死によって死臭で満ちていたとの記録がある。

これらの死がユーラシアでの死と異なるのは、殺人死ではないため「恨む相手も復讐を誓う敵もいない」ということなのだ。暮らしを支えてくれる自然＝天の気まぐれが引き起こした死なのだから、文句も言えずただただ粛々と受け入れるしかないのだ。

戦いのために軍団をきつく縛り付ける必要もなかつた日本人は、厳しい戒律を求める一神教を受け入れることはなかつた（積極的に受け入れた人もいるが、あくまで一般論、全体論を述べている）。明治以降、キリスト教を禁止することもなくなつたが、信者が大幅に増えていかないのには、こうした背景が存在しているためだと考えている。（続く）